うれしい仲間　詩編133篇1-3節　ルカ福音書24.13-16、28-35　　大澤秀夫

**はじめに**

諏訪教会の礼拝を共にできますこと感謝です。隠退して信州に戻ってきて、人の生涯は旅であることをつくづく思わされています。聖書にもたくさんの旅人が出てきます。今朝はルカ福音書24章の旅から、私たちの旅について思いめぐらしましょう。

**１　エマオに向かう道で起きたこと**

「ちょうどその日」（24.13）とは、主イエスが復活された日です（24.1）。「イエスは生きておられる」という知らせを、女たちが聞いた日曜日の午後、二人の弟子がエルサレムから西へ10ｷﾛほどの村エマオに向かって歩きだしました。その道で二人は見知らぬ旅人と行き会いました。二人から三人になり、そこに新しいことが始まります。これは私たちの旅においても同じ、大事なポイントです。第三の視点が大切なのです。

エマオに近づいた時、先に行こうとする旅人を二人は無理に引き止めます。食卓で旅人がパンを取り、裂いてお渡しになります。その時、二人の目が開かれ、主イエスだと分かりましたが、その姿は見えなくなりました。二人は主イエスが確かに共にいてくださることを知り、「その時心が燃えたではないか」と互いに語り合いました。すぐに二人はエルサレムに戻り、仲間に道で起こったこと、イエスに会ったことを話しました。

**２　主イエスは、私たちと一緒に歩いてくださる**

　　エマオの出来事が私たちに教えてくれることの第一は、主イエスが私たちと一緒に歩いてくださる、ということです。主イエスこそ、私たちの生涯の変わらない同伴者です。

　　第二は、主イエスがパンを裂いて私たちに与えてくださったことです。主イエスは私たちのために十字架につき、命をささげて私たちに永遠の命の希望を与えてくださいました。キリストの体であるパンをいただく私たちは、イエス・キリストの十字架と復活の命につながるのです。

　第三に、私たちは復活のキリストにつながることを通して一つとされた旅の仲間です。

教会は、終わりの日まで希望を失うことなく、共に生きるように、私たちを招き、養い、支える、私たちの旅のベースキャンプです。

**３　2024年ノーベル平和賞が日本原水爆被害者団体協議会（被団協）に授与**

　　受賞理由の中に、次の一文がありました。「ノーベル賞委員会は、今年の平和賞を日本被団協に授与することで、肉体的苦しみやつらい記憶を、平和への希望や取り組みを育むことに生かす選択をした全ての被爆者に敬意を表したい。」

　　世界にあふれている苦しみやつらい記憶をマイナスに終わらせないで、平和への希望と、そのための取り組みに変えていくこと、それが被団協の選んだ道でした。

イエス・キリストの生涯と十字架の死、そして復活は、私たちが自分たちの弱さ、愚かさ、罪をこえて、新しく生きることへと招き、励まし、希望と力を与えてくださるのです。

**４　うれしい仲間のいることの幸い**

旧約聖書の詩人は、兄弟姉妹が共にいることの幸せを歌っています。「見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び」（詩編133.1）。時代を越えて、教会がここにあることの恵みを心に憶えましょう。